



HAL
open science

Emmanuel Antier

► **To cite this version:**

| Emmanuel Antier. . , 2017, 2, pp.209-219. hal-04440378

HAL Id: hal-04440378

<https://hal.science/hal-04440378>

Submitted on 6 Feb 2024

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

TICE に関する研究についての異見

アンティエ エヌマエル

1. はじめに

言語教育および他の諸領域において、多くの実験報告が、〈教育に応用された情報通信技術〉（Technologies de l'Information et de la Communication appliquées à l'Enseignement. 以下、TICE と略記）の効用をうたっている。これらの実験は、技術の革新がおのずから教授法の革新を引き起こすという仮定から出発していることが多い。要するに、すべての教師が恒常的に TICE を用いさえすれば、言語の教育 - 学習はより効果をあげるようになるというのだ。しかしながらこうした研究（その多くはデジタル好きの実践家たちによって行われたものだ）は、大半の教師たちの日々の実践を反映するものではないように思われる。いっぽう、（フランスでも日本でも）主意主義的〔=新自由主義的〕教育政策によって支えられているにもかかわらず、教育現場への TICE の導入は限られたものにとどまり、掲げられた目標とそこに達するため投じられた財政措置を大きく下回ることも少なくない。この失敗を目の当たりにし、教師の研修不足がしばしば指摘される（たとえば Abboud-Blanchard & Emprin, 2009 を参照）。だが、これは主要な理由ではないように思う。教師の大半が TICE の活用に進んで向かうことをしないのは、研修不足のためではない。それ以外の、言語の教育 - 学習という行為そのものに内在するがゆえに、より根本的で決定的な理由があるのだ。少なくともこれが、本稿で敷衍したい仮説である。そのために、主として私自身の日本の大学での外国語としてのフランス語（FLE : Français Langue Etrangère）教授経験に依拠することになる。網羅的ではないにせよ、TICE を活用しないことを正当化するいくつかの理由を手短に列挙する。結論として、言語教育における TICE 研究を今とは異なるやり方で考えるためのいくらかの道筋を示すことになる。

2. 技術上の理由

技術的な煩雑さが、TICE が用いられない第一の理由である。TICE を用いるためには、選んだ機器の取り扱いをよく知っているだけではなく、たとえばハードウェアや OS やインターネット接続と関連した複数の不測の事態を、涼しい顔で即座に解決できなければならない。デジタル機器の不具合は正常な動作のうちである。このことは、デジタル機器を使っていれば誰でも容易にわかる。だが、教室での不具合となると話は別だ。それは不安の種となる。教師を動揺させ、授業運営上の能力を失わせ、彼を失敗の状況に置く。教師の日頃の実践は以前の経験によって直接作り上げられる。その実践知は成功した行動から出てくる(とりわけ Schön, 1994 を参照)。それゆえ、デジタル設備への不信とそれらによって犯しうる失敗の危険性が、それらの使用を控えさせているのだと理解できる。ある教師が、テクノロジーぎらいというわけでもなく、そればかりかデジタル機器に入れあげていたとしても、理由があつて TICE を用いないという選択に向かうことはありうるのだ。

3. 運営上の理由

技術上の理由と関連して、運営上の理由を語ることができる。これはたとえば、教室の予約、ハードウェアのメンテナンス、あるいはまた、一回の講義の組み立てなどに関わるものである。もちろん、管理と関連するこうした問題は、おのおのの教育機関の設備の程度と質とにじかに左右される。だが、いくつかの困難は回帰的かつ不可避なものとして現れている。授業の前に、デジタル機器を用いようと望む教師は、たとえば、機器の動作を確認する、アップデートを実行する、新しい OS をインストールする、等々の作業を行わねばならない。授業中、彼は機器を立ち上げ、不具合が起こらないよう目を配らねばならない。授業の終わりには、ハードウェアを片付け、持ち運び、損傷がないかどうか確認する、等々がときに求められる。こうしたことすべては時間とエネルギーを奪うが、それでもたらされる教育上の利益はかならずしも明らかではない (Daguet & Wallet, 2012)。状況がこのようなものであってみれば、教師たちがより簡便な道具を用いることを好むのも理解できるというものだ。

4. 実利上の理由

教師たちの考えはなるほど理解できる、元から使用可能だったいくつかの道具、いくつかの「古い」テクノロジーが、十分な教育上の潜在能力を示しているのだから。電子黒板の例がこの点で示唆的である。馬鹿にならない数の機能を提供しているにもかかわらず、ほとんどの場合、電子黒板は、たんなるビデオプロジェクターとしてしか用いられていない (Karsenti, 2016)。教授法上の観点から見れば、だから電子黒板は、以前から使えたいくつかのテクノロジーと比べて決定的な寄与とはなっていない。同じ理屈から、コピー機はデジタル媒体と同等の潜在能力を提供しているといえる。それは取り扱いの容易な「個別モニター」を作り出すことができ、しかもこれは、掲示、保存、複製、再利用その他ができるのだ。このように、いくつかの「古い」テクノロジーは、より信頼に足り、より簡便でありながら、新しいテクノロジーに劣らず有効でありうるのである。言語教育において革新を行うため、生徒を能動的にさせ、話させ、相互に働きかけあうようにさせるためには、かならずしも高度化したテクノロジーの助けを借りることが必要というわけではないのだ。

5. 教授法上の理由

教授法上の理由が、おそらく、なぜ語学教師の日々の実践に TICE があまり導入されていないのかを、もっとも根本的に説明するだろう。ある意味で、この理由は、TICE の活用が自動的に言語の教育 - 学習を改善するというテクノロジーの側の仮定を反証している。この理由がそれに反証し反対するのは、言語の教育 - 学習に内在する構造的な束縛を考慮に入れているからである。この観点からすれば、第一に優先されるのは日々の実践である。テクノロジーの革新が実践の中に普及するためには、それが実践と齟齬を起こさず、方法的アプローチの助けとなり、すでに存在するさまざまな必要に応えるものでなくてはならない (Puren, 2016)。音声録音を流すことを可能にする新旧のテクノロジーの例が、とりわけ示唆的である。語学教師たちが、レコードプレーヤー、テープレコーダー、CD-ROM その他を迅速にそして継続的に採用してきたのは、これらのテクノロジー

上の革新が、ネイティブスピーカーによる話し言葉に生徒たちを触れさせる必要に応えるものであるからだ。ランゲージ・ラボラトリーの例もまた示唆ぶかい。それらが 1970 年代に用いられなくなったのは、音声だけの〔=映像を伴わない〕方法論による構造〔言語学〕的な練習が時代遅れなものとなったからである。この二つの例を通して見られるとおり、教授法の問題が TICE の利用にさいしての指針となっている。教授法の問題が、TICE の利用に先立ち、それを決定するのだ。私の教育目標は何だろう？ その目標に達するには、どの媒体がもっとも適しているだろう？ TICE の利用は有効な寄与たりうるだろうか？ こうした問いへの答えに基づいて、教師は TICE の助けを借りるか否かを決めることになる。

6. 教育上の理由

最後に、教育の問題と直接関わる理由をひとまとめにあげよう。二つの見解によってそれを例示することにしよう。一つめは語学の教室における相互作用に関わる。テクノロジー（タブレット、スマートフォン、その他）をあまりに偏重することが、教師と生徒の、さらには生徒同士のあいだの相互作用を減ずるおそれはないか、問うてみることができる。教育上の関係は、人間関係である。それは個人間のコミュニケーション、言葉の交換、まなざしのうちに生起する。この観点からすれば、デジタルディスプレイの偏重は教育行為への障害となりうる（たとえば Kambouchner, Meirieu & Stiegler, 2012 を参照）。第二の見解は、第一のものと重なる。より正確に言えば、現代社会において生徒たちがデジタル環境に過剰にさらされていることと関わる。ディスプレイの使用過多がはらむ危険性を（場合により、集中力を阻害したり、対人障害を引き起こしうるものとして）告発する声は、今日ますます高まっている（たとえば Tisseron, 2010 ; Nayebi 2014 を参照）。そうした研究は（そのうちのあるものは滅亡論の誘惑を免れていないかもしれないにせよ）、教育界に直接呼びかけている。デジタルディスプレイが増え続けている現状にあって、TICE の活用がわれわれが生徒たちに対して果たしうる最上の貢献とは言えないということは、じっさいありそうなことである。

7. 結論にかえて

誤解のないように願いたいですが、ここまで記してきたのは、TICE の使用に対する論駁ではなく、言語教育界で現在行われている TICE に関する研究のあり方に対する論駁である。じっさい、TICE 研究は、私がここで行ったいくつかの指摘をもっとよく考慮に入れるべきであるように思われる。そのためには、Christian Puren (2016)が強調しているように、教師の日常的な実践における TICE の使用に関心を向け、信念に満ちた実践家が恵まれた環境のもとで行う局限された範囲での実験によって得られたあれこれの結果を称揚することをやめるべきだろう。そうした研究は、TICE の評判を今ほど高めはしないかもしれないが、教師たちの実体験により合致した研究結果を導くだろう。とりわけ、彼らの実践を不信の目で眺めさせたり、彼らに罪悪感を抱かせることなく、古いテクノロジーへの彼らの愛着をよりよく理解するのに役立つことだろう。このような理解をともなった展望に基づくなら、TICE についての研究は、言語教育において使用可能な道具や手法の選択の幅を広げることをその目標とすることになるはずだ。最新のものであるがゆえに必然的によりよいものであるとみなされた新たな慣行を教師たちに押しつけることを目標とするのではなしに。繰り返すが、そこにあるのは政策決定者にかなり直接に影響を及ぼすテクノロジー側の仮定である。だが間違えないようにしよう。教授法研究の現状において、TICE の大がかりな整備という政策を正当化するものは何もないのだ。

【参考文献】

- Abboud-Blanchard, M. & Emprin, F. (2009). « Pour mieux comprendre les pratiques des formateurs et de formations TICE ». *Recherche et formation*, 62, 125-140.
- Daguet, H. & Wallet, J. (2012). « Du bon usage du "non-usage" des TICE ». *Recherches & éducatives*, [en ligne] <http://rechercheseducations.revues.org/958>.
- Kambouchner, D., Meirieu, P. & Stiegler, B. (2012). *L'école, le numérique et la société qui vient*. Paris : Mille et une nuits.
- Karsenti, T. (2016). *Le tableau blanc interactif (TBI) : usages, avantages et défis ?* Montréal : CRIFPE.

Nayebi, J.-C. (2014). « Grandir dans un monde numérique ». *L'Essentiel Cerveau & Psycho*, 19, p. 58-61.

Puren, C. (2016). « La didactique des langues-cultures face aux innovations technologiques : des comptes rendus d'expérimentation aux recherches sur les usages ordinaires des innovations », [en ligne] <https://www.christianpuren.com/mes-travaux/2016d>.

Schön, D.A. (1994). *Le praticien réflexif. A la recherche du savoir caché dans l'agir professionnel*. Montréal : Logiques.

Tisseron, S. (2010). *L'empathie au cœur du jeu social*. Paris : Albin Michel.

Tisseron, S., Stiegler, B. (2009). *Faut-il interdire les écrans aux enfants ?* Paris : Mordicus.